

April 1980

# 甲虫ニュース

# COLEOPTERISTS' NEWS

No. 49

日本産テントウムシダマシ科概説

佐々治寛之

テントウムシダマシ科 Endomychidae は系統的にはテントウムシ科に近いが、生息場所や色・形などからオオキノコムシ科に似た感じの割合人気のある食菌性甲虫である。日本産は42種でそれほど大きな科ではなく、中条道夫先生の書かれた優れた総説（日本動物分類——偽瓢虫科, 1939）があるが、現在入手困難になっているし、その後追加された種や学名の変更されたものも少なくないので、このあたりで邦産テントウムシダマシ科を整理し概観してみよう。

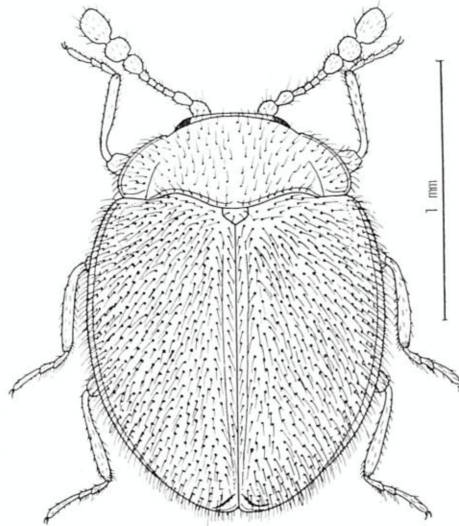
**研究略史** 1939年までの研究については中条(1939)に詳しく述べられているので、主にそれ以降の研究にスポットをあててみよう。まず世界の種についてみると、GERSTAECKER (1858)のモノグラフのあと、1901年 CSIKI の目録、1910年 JUNK の甲虫目録 (CSIKI 担当)の刊行、それに前後して GORHAM と ARROW が世界のファウナを対象にして多くの属種を追加し、Pic も相当数記載したが、さらに1939年には STROHECKER が戦列に加わっている。同氏は現在なお精力的な研究活動を続けており、400種近い新型を記載した。中でも1953年に刊行された *Genera Insectorum—Endomychidae* (4to 版, 140 pp., 15pls.) はそれまでに知られたすべての属を検討した上で検索表に組み込み、属の標徴を記載し、さらにそれぞれの属に含まれるすべての種をリストアップしている。まさに、戦後におけるこの科の研究は STROHECKER の独壇場の観すらある。各目録や *Zoological Record* などをもとに、種数の変遷をみると、1910年

83属 651種、1953年 88属 1041種、1979年 106属 1283種となる。1910年から1953年までに属数があまり増していないのはシノニムが大幅に整理されたためである。また現在、有効とされる種名の命名者を数えてみると次のようになる。

STROHECKER 383, ARROW 212, GORHAM 175, GERSTAECKER 141, PIC 95。数え間違いが相当あると思うが研究史を考える上に参考になろう。

日本の種についてみると、中条の総説 (1939) 以降、中条道夫、中根猛彦、木内盛郷がそれぞれ断片的な報告を書いており、私もごく最近若干の知見を追加した (佐々治, 1978)。1939年には日本産 (台湾等を除く) は29種だったのが、その後17種追加され、4種がシノニムなどで減り、都合、42種が知られていることになる。このうち、北隆館の原色昆虫大図鑑 (1963) に26種が図示されている。

また、系統分類に関する研究としては、GANGLBAUER (1899) によって確立された、Sphaerosominae, Mycetaeinae (Mycetaeini, Leisthini), Trochoideinae, Endomychinae (Daspini, Eumorphini, Endomychini) の4亜科体系がずっと定着して来たようで、多くの学者によって踏襲されている。STROHECKER (1953) は上の体系で Endomychinae 亜科に含まれるものを、さらに Endomychinae, Stenotarsinae, Eumorphinae の3亜科に分割しているが、特に深い根拠はなく便宜的なもののように思われる。しかし、一つ一つの属について所属を吟味したことは高く評価されようし、系統分類につい



第1図 *Dexialia minor* CHŪJŌ ヒメマルガタテントウダマシ

ては再検討を要するであろうことを指摘している。一方、甲虫の系統分類に関する大御所であるCROWSONは、通常テントウムシダマシ科に含まれる *Sphaeroma* 属の所属について疑問を提示し、除外した方がよいと主張、また佐々治(1971)はテントウムシ科の起源を論ずる記述の中で Sphaerosomidae なる独立した科として扱ひ、その後、CROWSONも各論著の中で Sphaerosomatidae (綴りはこの方が正しい)として用いている。事実、これをテントウムシダマシ科に含めると、いろんな点で矛盾が生じるのである。この属は日本から未知であるが、触れておく方がよいと思うので付記として紹介しておく。また、佐々治(1978)は、小形半球形の一群を、他の通常のテントウムシダマシ科とは異質であることから、別の亜科 Mychotherinae を設定したが、実は、この亜科も独立の科とした方がよさそうである。しかし、テントウムシダマシ科全体の系統分類が未完であるので、便宜上、同科の一亜科として扱っておきたい。佐々治はさらに、従来所属のはっきりしなかった *Eidoreus* 属なる甲虫がテントウムシダマシ科に含まれるべきことを主張した(日本昆虫学会第39回大会)が、このことについては原著が発表された段階で改めて紹介したい。

**一般形態** 多くは卵形の上翅部と長方形の前胸・頭部が密着した体形を示すが、時には全体が卵形又は半球形になることもある。背面は平滑で光沢をもつものが多いが、微細な被毛に覆われることもある。熱帯の種には、上翅上に顕著な瘤や鋭い突起をもつものもある。触角は一般に頭幅よりも明らかに長く、8~11節から成り、先端の3節(稀に2節)は顕著な球桿部を形成するが、ヒゲトテントウムシ科では4節からなり、先端節が著しく肥大する。小顎ひげ先端節は多くの場合鈎鐘形か円筒形で、時に先端に向って広がる場合があるが、強く斧形になることはない。前胸背板には1対の縦の条刻があることが多く、側溝 lateral sulcus と呼び、さらにその間の基部に沿って溝があることもあり、これを横溝という。跗節は3~4節からなり、4節の場合は第3節は短小で拡張することはない。腹部第1節に腿節線 femoral line という弧状の隆起線をもたない。腹部の気門は5対が機能的である。頭蓋内にある骨片(tentorium)は対をなす縦走骨の間は少なくとも後方にある一本の橋によって結ばれる。

**分類体系** 研究略史で触れたように、十分に検討がすすんでいないが、従来までの体系をなるべく尊重すると次のようになる。

- ENDOMYCHIDAE テントウムシダマシ科  
 I. MYCHOTHERINAE マルテントウムシ科  
 II. MYCETAEINAE ホソテントウムシ科  
 III. TROCHOIDEINAE ヒゲトテントウムシ科  
 IV. STENOTARSINAE ムタゲテントウムシ科  
 V. EUMORPHINAE オオテントウムシ科  
 VI. ENDOMYCHINAE テントウムシ科

## SPHAEROSOMATIDAE セマルテントウムシ科

### 亜科への検索表

(カッコ内の特徴は日本産種だけを対象とした場合の便宜的なものである。)

- 1(2) 中基節窩は中胸腹板の側方伸張と後胸腹板の接合によって側方に閉じ中胸後側板に達しない。左右の tentorium は中央で結合しない。触角は9又は10節からなることが多い。跗節は通常3節からなり、第2節は下方に伸張しない(体長は2.5mm以下で半球形~短楕円形、背面は細毛で覆われる).....MYCHOTHERINAE 亜科
- 2(1) 中基節窩は側方に開き、中胸後側板に達する。左右の tentorium は中央で接合する。跗節は通常4節からなる(体形は多くの場合細長く、体長が2.5mm以下の時は極く一部の例外を除き背面は平滑)。
- 3(4) 触角は4節からなり末端節は著しく大きい(体長3~4mm).....TROCHOIDEINAE 亜科
- 4(3) 触角は11節からなり、通常末端3節が球桿部を形成する。
- 5(6) 跗節の第2節は先方に向って多少太くなることはあるが、下方に伸張しない。第3節は微小ではない(3mm以下).....MYCETAEINAE 亜科
- 6(5) 跗節の第2節は先方に向って顕著に拡張し、下方に伸びる(例外あり)。第3節は微小。
- 7(8) 前胸背板前縁部に発音器を具える。背面は常に無毛.....EUMORPHINAE 亜科
- 8(7) 前胸背板前縁部に発音器はない。
- 9(10) 背面は常に無毛下唇中舌は通常縦長で側方に拡がらない.....ENDOMYCHINAE 亜科
- 10(9) 背面は細毛で密に覆われる(外国産のものでは例外あり)。下唇中舌は横長で側方に拡がる.....STENOTARSINAE 亜科

### Subfamily MYCHOTHERINAE

#### マルテントウムシ科

1978年、佐々治によって設立された亜科で、検索表に示したように、中基節窩が側方に閉じる、つまり中胸腹板側方突起が後胸腹板に接することにより、中基節は中胸後側板から隔てられることと、頭蓋幕状骨は1対の細い前腕とそれを結ぶ後方横橋からなり、1対の前腕は中央で結合しない点が最も重要な特徴である。また、跗節各節は単純で先方に拡張又は伸張しないで、跗節数は多くの場合3節であること、触角の節数も減少の傾向にあること、体形は半球形~短卵形で小形、背面には被毛を有することなど多くの共通点でまとめられる。現在14属がこの亜科に所属するが、STROHECKER(1953)の体系でMYCETAEINAE 亜科に含まれる丸形の属の多くはここに移される公算が強い。外見上は、テントウムシ科の小形のものに似るが、腹部第1節に腿節線を欠くことと触角が長いことで容易に区別され、また、中基節窩や幕状骨の様子も異なる。日本から6属7種が知られている。



日本産属への検索表

- 1 (2) 触角は11節；跗節数は3—4—4；上翅の小楯板わきから会合線に沿って深く顕著な溝がある…………… *Aymbius* 属
- 2 (1) 触角は9又は10節；跗節はすべて3節；上翅に会合線にそった溝があっても極めて繊細。
- 3 (4) 前背板の基縁はほぼ直線状で、基縁に沿って横溝がある。上翅の点刻は列状に並ぶ。前背板側溝は完全で、前縁に達する。触角は10節…………… *Idiophyes* 属
- 4 (3) 前背板の基縁は波曲し、中央部は後方に突出する。前背板の横溝はほとんど認められない。上翅点刻は列状にならない。
- 5 (8) 触角は10節。
- 6 (7) 前背板に側溝はない…………… *Mychothenus* 属
- 7 (6) 前背板の側溝は顕著で、前縁に達する…………… *Bystodes* 属
- 8 (5) 触角は9節。
- 9 (10) 前背板に側溝はない…………… *Dialexia* 属
- 10 (9) 前背板の側溝は前縁に達しないが顕著…………… *Dexialia* 属

Genus *Mychothenus* STROHECKER, 1953

ダエンテントウダマシ属

*Mychophilus* FRIVALDSZKY, 1877 とされていた属であるがホモニムで使用出来なくなり、上記属名に改められた。欧州、コーカサス、コンゴ、日本からそれぞれ1種が知られている。日本から記載された *Alexia japonica* REITTER, 1889 を中条(1938, 39) は本属に移したが、実はテントウムシ科の *Sukunahikona* 属のものであることが判明したので、日本には次の1種だけが分布することになる。

1. *Mychothenus asiaticus* SASAJI, 1978

ダエンテントウダマシ (第2-A図)

体長1.2~1.5mm, 楕円形で背面は強く膨らみ、暗褐色。触角が10節から成ること、前背板に側溝も横溝もないことで近縁の日本産他種から区別される。雄は翅端近くに1対の深い小孔がある。既知産地は福岡県英彦山と福井県雄島。生活史については未知であるが、雄島では竹藪から幼虫とともに採集され、幼虫・成虫ともに消化管内に黒褐色の菌胞子多数が見られた。

Genus *Dialexia* GORHAM, 1891 ベニモンマルガタテントウダマシ属

グァテマラから1新属新種が記載された後、スマトラから2種追加され (ARROW, 1926), 日本から次の種が発見された。

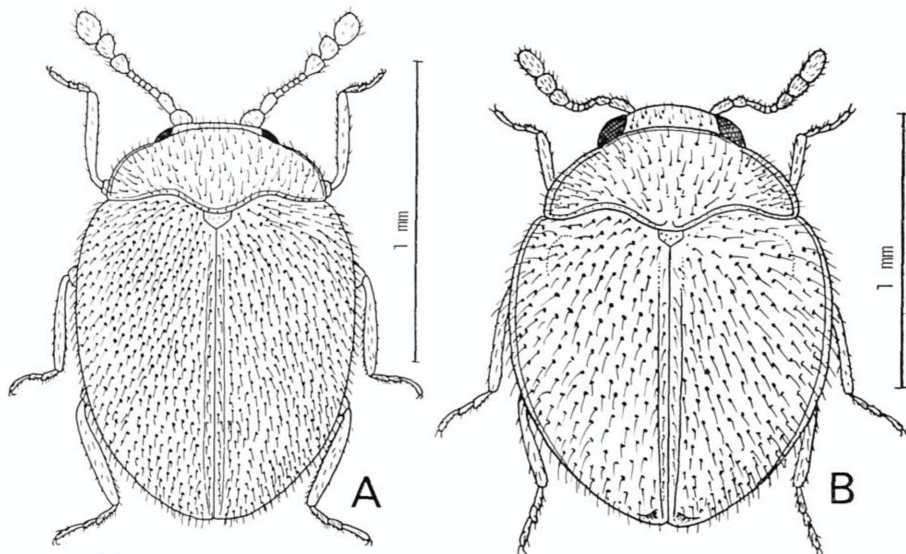
2. *Dialexia hisanoi* SASAJI, 1978 ベニモンマルガタテントウダマシ (第2-B図)

半球形に近く、体長1.5mm。背面は黒褐色で、各上翅の中央に大きな赤褐色紋があるが地色との境は不明瞭。雄は上翅翅端近くに前種同様小孔がある。福井県勝山市岩屋の樹皮下で越冬中のものが得られた。種名は採集者久野賢一君 (当時福井大学学生) に因む。

Genus *Dexialia* SASAJI, 1970 ヒメマルガタテントウダマシ属

前属に似るが、前背板に明瞭な側溝がある。台湾から新属新種 *Dexialia ovalis* SASAJI, 1970 が記載され、次の種が日本から記載された。属名は前属 *Dialexia* の並べかえである。触角が9節であることから次の属と区別され、前背板後縁が波曲することで、*Clemmus* — *Exysma* group と異なる。

3. *Dexialia minor* (CHŪJŌ, 1941) ヒメマルガタテントウダマシ (第1図)



第2図 A: *Mychothenus asiaticus* SASAJI ダエンテントウダマシ;  
B: *Dialexia hisanoi* SASAJI ベニモンマルガタテントウダマシ

短卵形で体長1.3~1.5mm, 暗褐色~黒褐色, 一見したところ *Mychothenus asiaticus* (前掲) に似ているが, 丸味が強く, 前背板側溝を持つ点で容易に区別できる。この種は最初近縁の *orbicularis* と比較して *Symbiotes* 属の種として長野県野尻から記載されたが, 中根 (1958) は *Exysma* 属に移した。一方, STROHECKER (1953) は次に付記する *abbreviatus* REITTER, 1889 を原所属のまま *Clemmus* に残し, *minor* CHŪJŌ, 1941 をその?マークつきのシノニムとしている。中根 (1978) は原色大図鑑の補遺で *Clemmus* 属に訂正しているが正誤表の上であるので理由は述べていない。最近, 筆者 (1978) は諸形質を詳しく調べた上で, *Dexialia* 属に移した。北海道, 本州, 九州に分布。福井県では各地でかなり普遍的に採集される。

付. *Clemmus abbreviatus* REITTER, 1889 中条 (1938) は日本動物分類の中で, 標本を見ることが出来ず, 原記載を訳出している。STROHECKER (1953) は標本を見ぬまま, 原記載から *Clemmus* 属に所属しないと明記しながら, その正しい所属を決定できず, ?マークを付して一応この属の所に並べて, 同時に前述のように *minor* CHŪJŌ を?シノニムとしている。もし, このシノニム関係が正しければ, 当然 *abbreviatus* が有効名となるが, 混乱を避ける意味で, 正体のはっきりしている *minor* を差当り用いておき, *abbreviatus* を疑問種として保留しておきたい。確かに, 原記載だけに関するかぎり, 別種とは言い難い。

Genus *Bystodes* STROHECKER, 1953 マルガタテントウダマシ属

ミンダナオ島の1新種 *paulus* STROHECKER に対して作られた属で, その後, コンゴから1種, 台湾から1種, セイロン島から1種が追加され, 次の種を加えて5種が知られていることになる。

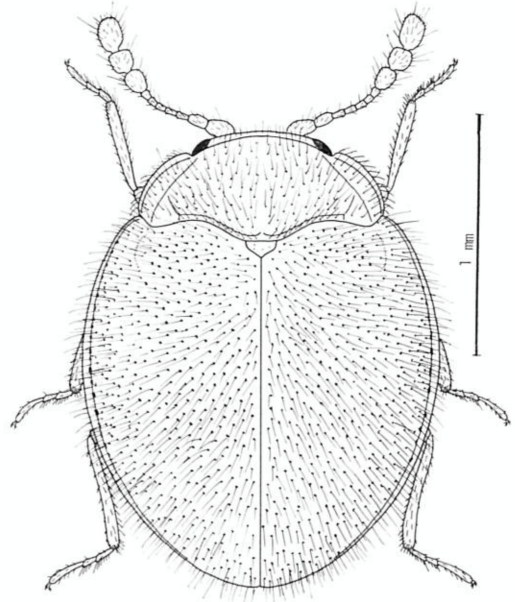
#### 4. *Bystodes orbicularis* (GORHAM, 1887)

マルガタテントウダマシ (第3図, 原色大図鑑 pl. 107-26)

半球形, 体長1.7~2.2mm, 赤褐色。精査すれば, 属への検索表に示したような特徴で本邦他種から区別出来るが, 大形で明るい色をしている点と, 上翅に点刻列がないことで区別できる。原産地は柏木と栗ヶ原であるが, 筆者は下北半島湯の股及び日光の標本を検することが出来た。*Symbiotes* (?) として記載され, ARROW (1920) は *Exysma* とし, STROHECKER (1953) は *Idiophyes* に移しているが, 上記学名を用いるのが正しいと思われる。

#### 付 SPHAEROSOMATIDAE について

GANGLBAUER (1899) 以来, テントウダマシ科の特異な一群として取扱われていたが, 本文に示したように独立の科とする方がよい。*Sphaerosoma* LEACH, 1819 (= *Alexia* STEPHENS 1832) 1属だけからなり, 旧北区だけに産し, ヨーロッパから小アジアにかけて多くの種に分化し, 現在までに50種



第3図 *Bystodes orbicularis* GORHAM  
マルガタテントウダマシ

ほどが記載されている。日本からは未記録であるが, 将来発見される可能性も皆無ではないので, 簡単に紹介しておく。なお, *Alexia japonica* REITTER, 1889, はテントウムシ科の *Sukunahikona* 属に移されるべきものなので除外される。

体長1~2mmで, 半球形, 背面は強く膨隆し, 多くは長細毛で密に被われるが無毛の種もある。ほとんどは一樣に黄褐色~赤褐色で無紋。特に独立の科とされる重要な特徴は次のとおりである。腹部の機能的な気門は7対 (テントウムシ科以下「C」, テントウダマシ科以下「E」では5対); 後胸腹板は後方で狭く前方に向って強く拡がり, そのため後胸前側板の腹面露出部は斜の長三角形となり (「E」, 「C」では平行で長方形), 後胸後側板は広く露出する (「E」, 「C」では僅かに露出する)。頭蓋幕状骨は波曲する1対の細い縦走部とその後端近く横橋から成る。幕状骨の様子は「E」の *Mychotheninae* 亜科に似る, 「E」では縦走部が中央で接合し, 「C」では横橋がない。そのほか, 「C」に見られるような腿節線が後胸と腹部第1節にあり, 中基節窩は外方に開く; 跗節は4節からなり, 基部2節はほぼ円筒形で, 第3節は微小でない; 小顎ひげ末端節は丸い。また, 幼虫 (PEYERIMHOFF, 1913) は4対の小眼を有し (「C」では3対), 尾端に顕著な叉状棘突起がある (「C」, 「E」ではない)。腹部気門が7対あることや, 幼虫に叉状棘突起をもつことなど, 原始的な形質をもつが後胸の構造や口器はむしろ特殊化の傾向を示し, *Corylophidae* ミジウムシ科との類縁も見られる。 (福井大学教育学部)



アマギカラカネハナカミキリの分類上の地位について

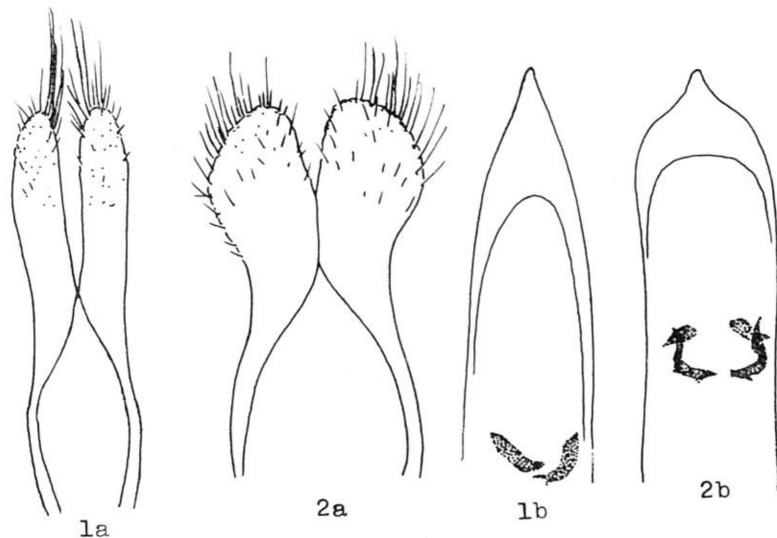
三宅 義一

アマギカラカネハナカミキリ *Gauvrotus amagisana* OHBAYASHI は、もともと上記のような独立種として記載されたが、最近の図鑑類その他で、カラカネハナカミキリ *G. doris* BATES の亜種として取扱われることが多い。しかし、交尾器を観察してみると図のように側片が細長で、ペニスの先端も次第に細まっており、内袋中の骨片も全く形状を異にしている、外形上の特徴とともに独立種としての標

徴を具備していると見て差支えないと思われる。なお、カラカネハナカミキリのほうは、九州低地などにアマギカラカネハナと類似した色彩のものが現われるが、f. *suvorovi* を含めて北海道から九州まで交尾器の構造は全く安定しているようである。

本稿を草するに当ってお世話になった前波鉄也、露木繁雄、石橋英昭の諸氏にお礼を申し上げる。

(東京都多摩市)



カラカネハナカミキリ属2種の交尾器：1. *G. amagisana* OHBAYASHI  
2. *G. doris* BATES ; a. 側片先端部, b. 陰茎先端部

○三重県のカエデヒゲナガゴバネカミキリの記録

カエデヒゲナガゴバネカミキリ *Molorchus ishiharai* OHBAYASHI は、三重県下には分布しないものの如く報ぜられているが<sup>1)</sup>、筆者は、次のとおり、本種が県下の南勢地区並びに布引山地の低山帯に分布するのを確認したので報告する。

1頭, 5. v. 1978, 伊勢市朝日谷, 大川親雄氏採集; 1頭, 29. iv. 1979, 安芸郡安濃町平尾, 筆者採集; 1頭, 5. v. 1979, 名賀郡青山町上高尾, 大川親雄氏採集。

いずれもカエデの花上から得られたものである。標本を検させていただいた大川親雄氏に御礼を申し上げる<sup>2)</sup>。

1) 高桑正敏(1978): 甲虫ニュース, (41): 1—4.

2) 筆者は標本を検してはいないが、文献上の記録として、次のものがある。

3頭, 15. iv. 1973, 多気郡大台町長与, 西村照雄氏採集:(西村照雄: ひらくら 19.5, 1975).

(三重県津市, 川原 誠)

○オオマルガタゴミムシ北海道の記録

オオマルガタゴミムシ *Amara (Curtonotus) gigantea* MOTSCHULSKY は本邦においては本州、四国および九州に分布し、北海道からの記録はないと思われる。筆者は北海道旭川市において本種を採集しているの、古い記録ではあるが報告しておく。旭川市新旭川, 2♂♂, 1♀, 25. vi. 1967, 筆者採集。

屋外運動場わきの草地の石下から得たものである。

また、同亜属のナガマルガタゴミムシ *Amara (Curtonotus) macronota* SOLSKY も北海道からの記録はなかったが、最近、森 (Jezoensis, 1979) により千歳市から初記録された。筆者も旭川市で落し穴トラップにより採集しているの、加えて報告しておく。

旭川市突硝山, 1♂, 5—10. viii. 1970, 筆者採集。

(旭川市, 松本英明)

## 奄美大島湯湾岳の甲虫若干

大石美也子

1974年秋、筆者等は奄美大島湯湾岳において採集を行なった。そのうち以下の種は採集例が少ないようなので幾分古い記録ではあるが報告しておきたい。

1. *Pterostichus* sp. [写真]

1♀, 11. x. 1974; 2♀, 13. x. 1974.

いずれも、山頂の腐肉トラップより得た。体長18mm程度の大型の顕著な種である。奄美以南の南西諸島における *Pterostichus* の記録はいまだないと思われ、♂の発見を期待したい。

2. *Haplochlaenius insularis* S. UENO アマミスジアオゴミムシ

1♂, 1♀, 11. x. 1974.

山頂におけるアマミノクロウサギの糞トラップに入っていたもの。上野俊一博士による記載以来の記録かと思われる。

3. *Neolucanus saundersi protogenetivus* Y. KUROSAWA タテヅノマルバネクワガタ

1♂, 14. x. 1974.

山腹の車道を歩行中のものを得た。

4. *Copris brachypterus* NOMURA マルダイコクコガネ

15~16. x. 1974.

この時期には個体数はきわめて多いもののように同時に得られたオオシマエンマコガネをさらに上回るものであった。

5. *Onthophagus shibatai* NAKANE アマミエンマコガネ

2頭, 10. x. 1974; 1頭, 11. x. 1974; 1頭, 15. x. 1974.

6. *Onthophagus hsirakii* NAKANE ネアカエンマコガネ

5頭, 10. x. 1974; 1頭, 11. x. 1974; 2頭, 12. x. 1974.

7. *Aphodius (Pleura-phodius) lewissi* WALTERHOUSE コスジマゴツコガネ

1頭, 13. x. 1974.

山頂におけるアマミノクロウサギの糞に来ていたもので奄美大島からは初記録かと思われる。

8. *Aphodius (Volinus) ohishii* MASUMOTO

1♂, 1♀, 15. x. 1974.

本標本をもとにして、1975年、益本仁雄氏により記載された。

以上のうち、4・5・6・8の4種は中腹の原生林中から得られた。

9. *Catapiestus subrufescens* PIC フチバヒラタゴミムシダマシ

1頭, 9. x. 1974.

本種のみは湯湾部落内に積まれた伐採木の樹皮下より得た。

採集は筆者および大石久志、標本は筆者の手許に保管されている。

尚、末尾ではあるが、日頃より御指導いただいている中根猛彦博士、食糞コガネムシを同定していただいた益本仁雄氏、そして写真撮影の労を引き受けてくださった今坂正一氏に厚くお礼申し上げます。

(伊万里市)



## ○徳之島のオオシマトツバタムシ

オオシマトツバタムシ *Paratrachys princeps* Y. KUROSAWA は奄美大島と沖縄本島だけから知られ、徳之島からは未記録との由であるが(黒沢, 1976)、手元に下記の標本があるので報告する。

徳之島尾母, 39頭, 25. vi. 1961, 筆者採集, イタバカズラより。体長2.6~3.7mm。

なお、手元にある沖縄島久手堅産の17頭(体長2.4~3.7mm)と比較すると、多少円味が弱い感じがするが、点刻の強さには変異が相当あり区別が困難である。奄美大島の標本を持っていないので亜種の決定は保留しておく。

(福井大学教育学部, 佐々治寛之)

## ○石垣島のキボシフナガタタムシ

日本領土内のキボシフナガタタムシ *Acumaderella luzonica* (NONFRIED, 1895) の記録はすべて八重山群島の波照間島に限られているが、筆者は石垣島川平付近の伐採跡地において本種2頭を採集したので報告する。

2頭, 石垣島川平付近, 11. viii. 1978, 筆者採集所蔵。

なお、この伐採跡地では同時にサツマウバタムシも多数得ている。(東京都港区, 伊藤 武)

## ○ニッコウアカコメツキの記録

ニッコウアカコメツキ *Pseudelater nikkoensis* OHIRA は1964年に日光の丸沼で採集された1雄個体に基づいて1973年に記載された種で、その後全く採集されていない珍品であるが、筆者の1人平井は静岡市安倍峠でカエデの花より1雄を得ているのでここに報告しておく。

1雄, 静岡市安倍峠, 27. v. 1978, 平井採集。

なお、本種は九州の祖母山より記載された *Pseudelater soboensis* (OHIRA) に酷似するが、体はやや小型(体長約8.5mm幅約2.5mm)で細長く、前胸は台形であること、翅鞘は基部 $\frac{2}{3}$ がほぼ平行状で、基部の約2.6倍の長さに等しいことなどの点で後者から区別することができる。

(東京農大, 鈴木 互, 静岡市, 平井克男)



## ○北海道からのモモグロハナカミキリの記録

モモグロハナカミキリ *Toxotinus minutus reini* (HEYDEN) は草間博士 (1973) による日本産カミキリの生態と分布一覧表に北海道の記録がなく、その後の石田浩司・青木重幸 (1973) の札幌産カミキリ目録などを調べても北海道からの記録を見出すことができなかった。あるいは私の見落としで既に記録されているのかもしれないが、念のためにここに私の所蔵している北海道産標本を記しておく。

1 ♂, 北海道釧路支庁川湯, 27. vii. 1970, 田中明採集。(横浜市金沢区, 高桑正敏)

## ○納沙布岬のゴミムシ類 (第2報)

1979年9月14日, 根室半島の納沙布 (ノサップ) 岬において, 前年8月とほぼ同じ場所で採集する機会があったので, その結果を第2報として簡単に報告しておく, 当日は低温で小雨が降る条件下で, 採集時間は僅かに40分であった。

1. ヨツボシミズギワゴミムシ *Bembidion morawitzi* CSIKI

個体数は少なく, 僅かに3頭しか得られなかった。いずれも壤土の芥下で生活していた。

2. カギモンミズギワゴミムシ *Bembidion poppii* NETOLITZKY

個体数は少なく, 僅かに3頭であった。草地の砂壤土の芥下で得られた。

3. トックリナガゴミムシ *Pterostichus hapto-deroides japonensis* (LUTSHNIK)

僅かに1頭で, 羽化直後のものであった。草地の砂壤土の芥下で得られた。

4. マルガタナガゴミムシ *Pterostichus subovatus* (MOTSCHULSKY)

僅かに2頭しか得られなかった。草地の芥下で生活していた。

5. セボシヒラタゴミムシ *Agonum impressum* PANZER

砂地の芥下から5頭を得た。なお目撃したものが4頭いたので, 個体数は少なくはない。

6. ゴミムシ *Anisodactylus signatus* (PANZER)

12頭を得た。このうち3頭は羽化直後のものであった。草地や砂壤土の芥下で生活していた。ほかに目撃した個体が16頭なので, 個体数は多い。

7. アカガネマルガタゴミムシ *Amara ussuriensis* LUTSHNIK

砂地の芥下で9頭を得た。シベリアマルガタゴミムシと混って生活している。個体数は比較的多い。

8. シベリアマルガタゴミムシ *Amara majuscula* CHAUDOIR

砂地の芥下で27頭を得た。目撃したものが17頭いたので, 生息個体数は多い。

以上の5属8種であった。今回の採集で始めて得られたのはマルガタナガゴミムシ, アカガネマルガタゴミムシおよびシベリアマルガタゴミムシの3種で, 前回採集したものをあわせると, この岬の東端には5属10種が分布していることになる。

(北海道十勝農試, 井上 寿)

## — &lt; 紹介 &gt; —

馬場金太郎編：新潟県の昆虫 (越佐昆虫同好会々報50号慶祝論文集), B 5版, 249pp., 1 color plate. 1979年12月15日発行。

新潟県は周知の如く, 本州の中で四番目に大きな面積を持つ県で, 北緯37°-39°に亘って南北に長く日本海上に点在する佐渡ヶ島および粟島をも包含している。東南から南側にかけては越後山脈, 三国山脈および飛騨山脈等の山なみが連なり, それらが越後平野や高田平野を圍繞するとともに他県との境をなしている。このような地形のため, 冬期はシベリアからの季節風による影響で豪雪地帯として知られ, 厳しい自然状況を呈しているが, 一方, 沿海の地域は対馬海流に洗われるために冬季を除いては緯度のわりには温暖な様相を呈していることが良く知られている。このような多様な自然環境は当然のことながら昆虫相に大きな影響をおよぼし, 本県に生息する昆虫類の豊富さを予測させている。

新潟県の昆虫相の解明は長年に亘って馬場金太郎博士および同博士が主宰する越佐昆虫同好会々員によって精力的に実施され現在も継続されているが, これによって多くの新知見や分布学上いくつかの興味ある問題点が提起されてきた。それらの結果は同会の機関誌である「越佐昆虫同好会々報」に公表されてきたが, このニュークで貴重な機関誌が昨年末に50号の発行をみるにいたったのを記念して, このたび上記標題の印刷物が発刊された。この印刷物はB 5版, 249頁で21篇の論文が収録され, 冒頭にはババツマグロシリアゲムシおよびヨシムシのカラー写真が飾られ花をそえている。これらの論文はいずれもそれぞれの専門分野の研究者によって執筆されたもので, 新潟県に關係した昆虫類を取り扱ってはいるものの, それぞれの分野の研究者には見逃すことのできない重要なものである。甲虫関係は9篇の論文が含まれているが, それらの標題, 著者および概要は下記の通りである。

森本 桂：新潟県のゾウムシ類目録。本目録にはオトシムシ科47種, ホソクチゾウムシ科10種, ゾウムシ科192種, オサゾウムシ科3種の合計252種が記録されている。

中条道崇・馬場金太郎：新潟県のゴミムシダマシ科甲虫。新潟県本土から53種, 佐渡ヶ島から23種, 粟島から5種のゴミムシダマシ類が記録されている。

渡辺泰明・馬場金太郎：新潟県内におけるアリガタハネカクシ類の分布。新潟県北部には *Megalopaederus lewisi* が, 南部には *M. wadai* がそれぞれ生息し, これら両種が北部と南部とに生息地帯がわかれていることを指摘し, 両種の雄交尾器を図示している。

田野口康彦：新潟県のアリヅカムシ(1)。新潟県内から採集されたアリヅカムシ類31種を記録している。

妹尾俊男：新潟県産ヒゲナガゾウムシ科・新潟県産ヒゲナガゾウムシ類21種を記録すると同時に, 各種についての分類学および生態学的知見をも併せ

て報告している。

中根猛彦：新潟県の主として小さい科の甲虫目録。新潟県産甲虫類の中から微小な甲虫類30科109種を記録している。

野淵 輝：馬場金太郎博士採集のキクイムシ類。新潟県産キクイムシ科30種、ナガキクイムシ科2種が記録され、先に村山醸造博士によって記録されていた同県産キクイムシ類の若干種について修正意見が加えられている。

黒沢良彦：新潟県より新たに記録されるタマムシ類。新潟県から未記録の3種および佐渡ヶ島からの1未記録のタマムシをそれぞれ記録し、併せて先に報告したタマムシ類で種名が変更されたものについて訂正を行っている。

久松定成：新潟県のケンキスイ科(II)。新潟県より未記録のケンキスイ28種を記録し、先に報告した2種のケンキスイがそれぞれシノニムとなったため、併せて学名の訂正を行っている。

なお、この文献の入手希望者は下記へ連絡すれば購入することができる。

〒959-28 新潟県北蒲原郡黒川村黒川

馬場金太郎 定価：¥ 3,500 (送料別)

(東京農大, 渡辺泰明)

### —<連絡・報告>—

◇談話会 本年度の例会も従前通り、3の倍数月に開催する予定ですのでお含み置き願います。なお、昨年開かれました談話会での演題および演者は下記の通りです。

第1回例会 昭和54年4月21日 於：国立科学博物館、長野県島々谷の *Pidonia* 属の生態調査—特に垂直分布と訪花性について—窪木幹夫(東京農大)。第2回例会(特別集会) 昭和54年10月12日 於：九州大学(博多)、この集会は九州大学で日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会合同大会が開催された折に行われ、25名の会員が参加した。第3回例会(特別集会) 昭和54年11月18日 日本鞘翅目学会と合同で行われた。於：筑波大付属駒場中高等学校、1)平地産オオルリオサムシの変異について、安田幸夫(函館市)、2) *Csikia* 属およびそれに近縁のグループについて、鈴木 互(東京農大)、3)台湾の *Pidonia* 属の類縁関係について(特に *submetallica* group と *meridionalis* group について、斎藤秀生(東京農大)。第4回例会 昭和54年12月16日、於：国立科学博物館、1)台湾および琉球列島のマルバ

### 昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

ネクワガタ属について、境野広行(東京農大)、2)タイ国北部での採集(スライド映写)、鈴木 互(東京農大)。なお、談話会終了後、有志によって恒例の忘年会が「鳥正」で行われましたが、その折、会員寄贈の「余剰文献」等のオークションが行われ、売上金のすべてが本会に寄附されました。ご協力いただいた林長閑、草間慶一、境野広行、上野俊一、山崎秀雄(ABC順)諸氏に厚くお礼申し上げます。

### ◇昭和53年度会計報告

#### 一般会計収支決算報告

| 収入の部      |           | 支出の部              |           |
|-----------|-----------|-------------------|-----------|
| 前年度繰越金    | 41,597    | 甲虫ニュース(No. 45~48) | 373,940   |
| 会費        | 563,000   | 印刷費               |           |
| バックナンバ販売上 | 202,900   | 通信・郵送費            | 75,560    |
| 広告費       | 80,000    | 雑費                | 10,940    |
| 預金利子      | 1,183     | 次年度繰越金            | 597,440   |
| オークション売上金 | 19,200    |                   |           |
| 寄附金*      | 150,000   |                   |           |
| 合計        | 1,057,880 | 合計                | 1,057,880 |

#### 特別会計収支決算報告

| 収支の部       |         | 支出の部       |         |
|------------|---------|------------|---------|
| 前年度繰越金     | 344,496 | 甲虫目録第3輯印刷費 | 158,350 |
| 甲虫目録第3輯売上金 | 85,970  | 通信・郵送費     | 100     |
| 預金利子       | 1,436   | 次年度繰越金     | 273,452 |
| 合計         | 431,902 | 合計         | 431,902 |

\*) 馬場金太郎博士より「日本産甲虫目録」Nos. 15~17の印刷費として150,000円の御寄附を受けた。会費の安い本会としては、今後も甲虫目録の発行には有志の方々の御援助を仰いで行くより他はないが、今回の馬場博士の御芳志は特に有難く、紙上を藉りて厚く御礼を申し上げる(黒沢良彦)。

### 甲虫談話会

会費(一カ年)1500円、次号は6月30日発行予定、投稿〆切は5月20日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364) 2311 振替東京0-60664

### タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850 (以下同様)、第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯 ¥1,600, ¥1,050, 其他、各種器具、針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

### タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479